

周氏兄弟の「作家翻訳」：『現代日本小説集』を中心に

著者	李 雪
内容記述	筑波大学博士（文学）学位論文・平成25年3月25日授与（甲第6365号）
発行年	2013
URL	http://hdl.handle.net/2241/120025

氏 名 (本籍)	李	雪 (中 国)
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)	
学 位 記 番 号	博 甲 第 6365 号	
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科	
学 位 論 文 題 目	周氏兄弟の〈作家翻訳〉 －『現代日本小説集』を中心に－	
主 査	筑波大学教授	博士 (文学) 浜 名 恵 美
副 査	筑波大学准教授	博士 (学術) 加 藤 百 合
副 査	筑波大学准教授	博士 (文学) 齋 藤 一
副 査	白百合女子大学教授	博士 (文学) 荒 木 正 純
副 査	広島大学准教授	博士 (学術) 西 原 大 輔

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、魯迅と周作人の兄弟による日本近代小説の翻訳集、『現代日本小説集』（1923 年 6 月刊行）を研究対象として、作家の翻訳を主体的で創造的な仲介として捉え直す〈作家翻訳〉という翻訳文学理論を援用し、中国と日本の文化の受容、交流、再構築の様相を新たに解明することである。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章

第一章 『現代日本小説集』とは何か

第二章 周作人「人間の文学」の出発－江馬修「小さい一人」を中心に

第三章 「危険なる洋書」と森鷗外「沈黙の塔」－翻訳作家の立場

第四章 「役所」と「文壇」の狭間で－魯迅と森鷗外「あそび」をめぐって

第五章 魯迅における芥川龍之介と菊池寛の歴史題材小説の受容

第六章 佐藤春夫と周氏兄弟の「相互翻訳」

結章

序章は、周氏兄弟の〈作家翻訳〉を概説し、『現代日本小説集』の先行研究を批判的に検討してから、翻訳が作家の創造性へ及ぼした作用を探究する本論の意義について論じている。

第一章では、魯迅と周作人が日本留学時に行ったヨーロッパ文学の翻訳を検討した後、『新青年』、『晨报』、上海の「商務印書館」を中心とした出版業界の状況と照らし合わせて、『現代日本小説集』が出版された当時の中国の新しい文学の建設という時代的・文化的・個人的背景を解明している。さらに、翻訳集に中国の伝統的な旧小説を脱し、近代文学の新式小説を移入しようとした彼らの意図を見出すと同時に、いくつかの具体例をあげて原文と訳文との比較分析を行い、翻訳の方法と特徴について考察している。

第二章では、江馬修の「小さい一人」の翻訳に着目し、ほぼ同時に書かれた文学評論「人間の文学」と関連させて、周作人の翻訳の動機を探っている。「小さい一人」は周作人が主張する「人間の文学」の典型であり、この翻訳は彼による「人間の文学」の文学的実践と言える。当時の周作人は、自己の文学論のために

必要な形式と内容を翻訳作業を通して模索していたか、創作活動の代替として翻訳に関わっていたことについて考察している。

第三章では、森鷗外の「沈黙の塔」を取り上げている。魯迅は日本でニーチェの思想を受容し、帰国後、『ツァラトゥストラ』の序文を翻訳して中国に紹介した。生田長江訳の日本語版をも参照した魯迅は、その序として鷗外が書いた作品に注目した。「危険なる洋書」の紹介者として非難された鷗外は、それに対抗して「沈黙の塔」を書いて、寓喩を込めた諷刺文学の領域を開拓した。「沈黙の塔」を翻訳した魯迅は、当時の北洋軍閥の厳しい「図書検閲政策」に対して、彼自身の立場を表明しようとしており、海外の文芸思潮に敏感に反応する翻訳作家であるのみならず、言論の自由を主張する戦う文学者でもあったことを解明している。

第四章では、魯迅が翻訳した森鷗外のもう一つの短編「あそび」を扱っている。この作品の翻訳には、「沈黙の塔」と共通するニーチェや検閲に関わるテーマを持つ作品であるとともに、魯迅も当時官僚文人であった事実が密接に関わっていた。官僚文人という共通点に着目することにより、魯迅が鷗外の立場を中国の政治・文化の文脈に置き換えて理解していたことを示した上で、「あそび」に触発されて自身も含めた中国の新しい知識人の内面的な風景を描いた作品、「端午の節季」を創作したことについて考察している。

第五章では、魯迅が翻訳紹介した大正日本の歴史題材小説の代表的作家である芥川龍之介の「羅生門」と菊池寛の「三浦右衛門の最後」を主対象としている。魯迅は、菊池が「三浦右衛門の最後」において寓喩を込めて「武士道」を批判したことを評価しつつ、封建「名教」を批判する同様の作品が中国文壇にはまだ欠けていると指摘したことについて考察している。「羅生門」に関しては、翻訳が彼自身の代表作「阿Q正伝」に影響したことを比較分析により検討し、彼が翻訳から吸収したものを創作意識や小説技法に活かした方法を解明している。

第六章では、翻訳を媒介とした周氏兄弟と佐藤春夫の交流の事例を取り上げている。彼らの文学上の往来を概観後、主に周作人訳の佐藤春夫の「雉子の炙肉」に着目し、この作品を中国の新文学建設との関係から分析している。周作人が、この作品を儒教的要素を完全に排除するより、「孔子」を聖人から一人の人間に変容させた「人間の文学」として読解したことを解明している。一方、佐藤春夫による魯迅作品「故郷」の翻訳紹介をめぐる受容の諸問題にも触れ、〈作家翻訳〉を媒介とした日中近代文学交流の過程を明らかにしている。

結章は、第一章から第六章までの成果をまとめ、さらに今後の課題について述べている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、『現代日本小説集』を〈作家翻訳〉という視点から解明することに取り組んだ意欲的な論文である。本論文の著者は、翻訳がなされた時期（1918年～1922年）が中国近代文学の成立過程と重なるため、自国文学を変革する上において、中国の文学者たちが外国文学に何を求めていたのかを端的に示すものであり、翻訳作品も文学史の中に位置づけられるべきであるという立場にある。論文の各章の考察は一貫してこの視点からなされ、また分析も著者の立場を支持するものとなっており、全体としてまとまりのある論考となっている。

『現代日本小説集』は、豊富な魯迅研究のある中国においても、翻訳であるということで、創作や評論に比べ著しく軽視されてきたが、ようやく1991年に西原大輔によって、翻訳を分析する意義と可能性が示唆された。これをうけて、本論文では、文学運動に積極的に関わりつつ創作した周兄弟にとり、翻訳が文学的活動の重要な軌跡を成すものと見なし、『現代日本小説集』の本格的な再検討を試みた。その際、時代状況を十分視野に入れつつ原典選択理由等を追究した結果、周作人が訳出した江馬修の作品の再評価など、意義深い成果をあげている。

著者は中国語を母語としており、周兄弟の訳文を、原文である日本語の語順や語彙とつきあわせるのみならず、当時中国の文芸が書かれ受容されていた一般的な文体や作品構成と具体的かつ詳細に比較しつつ、周兄弟、ことに魯迅の翻訳の特徴を明確にすることに成功している。また、翻訳の文脈を深く理解するために、同時代の新文学運動に関わる言説を収集し分析し、それと周兄弟、とくに魯迅の翻訳の作品選択、文体工夫、コメントの有無やその形式などを合わせて論じた。それにより、周兄弟と佐藤春夫という中日の作家による相互翻訳を論じた第六章を中心に新知見が多く見られる。

以上のように、本論文は力作ではあるが、問題がないわけではない。周兄弟の翻訳としては『現代日本小説集』以前に、欧米の翻訳小説集が日本留学中に刊行されているが、それとの比較研究に及んでいないこと、また中国の新文学運動自体に再検討の余地があることなど、なお今後課題を残している。

とはいえ、このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託するところのものであり、周兄弟の翻訳集『現代日本小説集』を〈作家翻訳〉の視点から新たに解明した本論文が達成した成果は極めて優れたものであると判断される。

平成 25 年 1 月 12 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。